

---

# いつものこと。

嫉妬

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」「および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

こつものこと。

### 【著者名】

アーティスト

アーティスト

### 【作者名】

嫉妬

### 【あらすじ】

特になんでもない日常のひとコマ、  
ではないか…。

## つまらなー1日

その夜、僕は知った。  
後悔したけど、もう遅い。  
君も知りたくないかったよね?  
「ごめんね…」

真っ暗な空の下で、僕らは歩いた。  
君はちゅうと急ぎ足だ。  
「待つてよ。」「  
君は足がとんでもなく速かつた。僕じゃあ追いつけない。  
わづ、見えなくなっちゃった。

こつものように彼は田を覚ました。  
今日の夢はひょっと切なげだった。  
着替えて会社に行く準備をする。  
母親がおかずを並べていた。

「あら、おはよ。」「

いつものように母は言う。そしてこつもの食卓。  
ご飯を食べる。白米は熱かった。  
歯を磨き、用を足す。今日は快晴だった。

「じやあ、行つてくるね。」「

「行つてらっしゃい。」「

今日は早めに家を出た。

今日の仕事は計算する」とと、文字を読む」とと、研究する」と  
と、眠ることである。「おはよ。」「

後ろから拓也君。

「おはよつ。」

いつもと同じことだ。

交差点で止まる。車が行き来している。

「どうして赤が危険なのかな。」

「何でだろうね。凄く綺麗な色なのに。」

拓也君はすぐに答えてくれる。そんなところが好きだ。

信号が青になる。もうすぐ職場だ。

「それじゃあ、教室で待っててね。すぐ行くから。」

「うん。」

拓也君は職員室に入つていった。

物知りな拓也君とは、いつたんこいでお別れ。どうせまたすぐ会える。

僕は階段を上がつていった。

また、つまらない一日が始まる。

## 君は夢の住人

今日の仕事は眠かった。

いつの間にか眠ってしまい、その度に拓也くんに起こされた。  
春は本当に眠くなる、きっと動物たちは冬眠になると同じだろ。う。  
そんな事を考える間に、一日が過ぎた。

「ただいまー。」

「おかえり。」

特別な会話は特に無い。別にする必要は無いからだ。  
すぐに階段を上る。右手に見えるのが僕の部屋。  
鞄を机に置き、仕事を取り出す。これが残業だ。  
じつとしてるよつはずつと良かった。残業を終えると下の階から母  
親が言った。

「『』はんよ。」

「はあーい。」

返事をしないと何度も言つてくる。それが彼女の悪いことこのほどだ。こ  
れがせつかちと言つのだろ。う。

今日のご飯は味噌汁にご飯におひたしに肉じゃが。  
肉じゃがはおいしかった。

もう寝る準備はできた。後は寝るだけ。

ベッドに入る。暖かい時は正直毛布でいいと思つ。う。  
9時。そろそろ眠れるだろ。う。また夢を見るんだ。

君を追いかける。どこかに隠れてるかもしねない。調べる。

でも、もういない。

果然と立ち廻くす。月の光が無情に降り注ぐ。

「ここにはもつ、僕しかいない。

「どこに行つちゃつたの？」

言葉だけが無情に響いた。

どれぐらい経つただろう。

「ずっとここに・・・いるよ。」

突然後ろから聞こえた。

振り返ると君がいた。でも、もつ違つ顔。

「また変わっちゃつたの？」

「うん。」

「何で変えちゃうの？」

「わかんない。」

君は悪戯に笑う。

そして、目が覚めた。

## 孤独は一人じゃない

別に僕は仕事場でいじめられているわけではない。こんな性格も、大抵の人には見せない。

「おはよう」

後ろから声がかかる。同僚の和泉さんだ。

「おはよっ。」

ゆっくり手を振る。すると彼女は笑顔を返してくれた。

「一緒に学校いこ?」

「うん。」

こちらも笑顔で返す。彼女はとても愛想がいい。

一人で交差点を進む。学校まであと少しだ。

「ねえ。」

「なに?」

「今日のお昼休みは暇?」

「うん、暇だよ。」

何かに誘われるんだろうか。話を聞くため校門を目前に立ち止まる。

「一緒に外で遊ぼうよ。たまには図書館だけじゃなくてさ。」

なんだ、そんな事か。また歩き始める。

「いいよ、どうせ暇だし。」

会社の鐘は寂しげに朝を知らせていた。  
あと30分か…。

昼休み。2人で庭に出る。

「何して遊ぶ?」

「何でもいいよ。」

「じゃあ…鬼ごっこ?」

「いいよ。」

久しぶりに会社の庭で走り回った。君はとても足が速い。  
拓也君は部屋から僕らを眺めていた。  
ちょっと嬉しくなった。

夜。寝る時間だ。

ベッドは干したての良いにおいがした。

そんなことを考えながら眠りに落ちた。

君と一緒に道を歩く。今度はゆっくりと。

「ほり、見えてきたよ。」

高い建物が見える。ビルでも上って行けそうだ。

「凄く高いね。」

そう、あれがきっと僕らの田指した場所。ずっとずっと先にあって、  
だけど明らかに見えるもの。

「そうだよ。あれが、塔だよ。」

塔？塔つて何だろう。

彼は微笑んで言った。

「時間の塔だよ。」

時間の塔…。

僕は塔を見上げながら、僕らはずつと歩いた。

そこで、田が覚めた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7887/>

---

いつものこと。

2010年10月28日04時52分発行